

観光を考える

中尾 武彦

ここ数年、来日する観光客が急増するのにもない、また、最近では東京オリンピックが近づいていることもあってか、日本のメディアで、観光業、英語で言えばツアーリズムについての報道を目にすることが多くなつた。私自身、個人的にも、仕事のうえでも、観光の意味をよく考える。

個人的には、大英博物館やベルサイユ、あるいは頤和園やホイアン（ベトナム）などの観光地で、アジアや中東、ロシアなどの客に圧倒される経験をしたことが大きい。15年前ごろまでは、ローマのコロッセオも、リスボンの城も、待つことなどなく見ることができた。2010年から2018年にかけてだけでも国際的な観光客（到着数）は

9億5000万人から14億人まで増加している。世界の人口の5人に1人が海外旅行をしていることになる。そのうち4分の1はアジアの観光客が占める。その間に、訪日外国人も860万人から3120万人に増えたが、これは日本だけの現象ではないのだ。

こうなつてくると、観光業は一大産業だ。たとえば、カンボジアやタイでは、2017年の観光業収入の対GDP比率はそれぞれ18%と14%に上る。南太平洋の島国では、この比率はもっと高い。今年5月にアジア開発銀行（ADB）の総会を開催したフィジーでは、2018年の観光収入のGDP比は34%、そこから食材や外国人従業員、

ホテルチェーンへの支払いなどのインプットを引かなければならないので、GDPへの貢献は14%だった。しかし、これにホテルや関連インフラの投資などを入れると40%にもなる。

なぜ、これほど観光業が盛んになったのか。まず、アジアや中東などの新興国で成長が高まり、中間層が劇的に増えたことがある。低運賃の航空会社が増えていること、各国が政策的に観光業を振興しビザの取得の緩和をしたことも大きい。また、ソーシャルメディアの発達により、行き先を考えたり、評判を知ったり、予約をしたりすることが簡単になった。バーチャルな世界で魅力的な場所や食べ物を知ると、リアルにそれを体験したくなる。大きく言えば、AIやロボットが人間の労働を代替するようになると仕事はどうなるのかという議論があるが、生産性、所得が高まれば、余暇が増えて、観光業や健康産業などの需要も拡大し、産業構造がシフトしていくのだと思う。

しかし、観光業の拡大はよいことばかりではない。あふれる観光客は海洋や森林などの環境に大きな負荷を与える。交通は渋滞し、店は混雑し、家賃や物価は高騰して、普通の生活ができなくなる。フィジーのセミナーでも話したが、たとえ

ば京都の魅力は、近所の豆腐屋や西陣の織屋などを昔から大切にしてきた住民の存在にある。廃仏毀釈の波にさらされたときに古いものを守つたのも、コミュニティだ。コミュニティがこわれてしまえば、寺社などの集まるただの歴史的なテーマパークになつてしまう。

それでは、観光業をより「持続可能」で、雇用やGDPへの貢献をより大きなものにするにはどうすればよいのか。ADBの最近のペーパーは、①環境や土地利用などについて住民も参加して適切な規制をかけること、②より付加価値の高い観光業をめざすためのプロフェッショナル人材を育成すること、③ネット環境や美しい街並みを含め観光の基盤になるインフラに投資すること——を挙げている。

観光は、人々に楽しみを与えるとともに、今やその国の成長や開発にも関わる大きな産業になつた。各国の人々がお互いのよいところを知り、敬意と共感を持つことにもつながるといふ重要な役割も果たす。それに加えて、美しい自然や歴史的な遺産を観光に生かすつどう守っていくのかは、人類の未来への我々の責任でもあるだろう。

アジア開発銀行総裁